

# 蘇州大学における日本語教育

張 龍 龍\*

## はじめに

日本国際交流基金の統計資料によると、海外の日本語学習者人口は1979年の調査以来増え続けており、2009年の時点で約365万人となっている。このうち、中国の日本語学習者数は83万人であり、これは初等、中等、高等教育機関での学習者及び民間の語学学校に所属する学習者の人数であるから、これ以外の独学者も含めるとかなりの数に達すると思われる。中国で日本語はすでに1980年代の早い段階で英語に次ぐ第二外国語の地位を確立した。筆者は2003年より蘇州大学外国語学院日本語学科に在籍し、2011年から、蘇州大学と花園大学の交流協定により、二年間の任期で交換教員として花園大学に赴任し、担当科目の中に、「中国における日本語教育」というのがある。本稿は授業内容の一部として蘇州大学における日本語教育に関する部分をまとめたもので、蘇州大学の日本語教育活動を略述し、今後の日本語教育の課題と展望についても検討を加え、所見を述べるものである。

## 1. 中国における日本語教育史の概略

まず、中国における日本語教育の歴史を簡単に振り返ってみよう。中国の日本語教育は明の時代にその濫觴<sup>みん</sup>を有すると言われている。近代になって、日清戦争をきっかけに、明治維新に成功した日本に学ぼうとする知識人の有志が来日し、一時期日本留学のブームを巻き起こした。1949年に中華人民共和国が成立してまもない頃、北京大学、北京対外貿易学院、吉林大学等の大学で日本語専攻が開設され、1959年に上海外国語大学にも日本語専攻課程が設置された。1962年に廖承

---

\*蘇州大学交換教師

志と高碇達之助の間で「中日総合貿易に関する覚え書き」、いわゆる「LT 協定」が締結された。その後、中日民間貿易が開始するという背景の中で、1964年大連日本語専科学校(現在の大連外国語学院)が設立された。1972年の中日国交正常化、そして、1978年に中日友好平和条約を締結して以来、多くの大学で日本語教育が開始されたので、1980年には当時の大平首相の提唱を受ける形で中日両国間政府の合意に基づく「在中国日本語研修センター」(中国名:日語教師培訓班、通称「大平学校」)が設立され、1980年から1985年までの5年間に計600名(当時の中国のすべての大学の日本語教師の大部分)の日本語教師の教育研修を実施した。蘇州大学日本語学科草創期の先生方もその「大平学校」で日本語教育の研修を受けた。80年代半ばに当時の胡耀邦総書記による日本三千青年の訪中招致や中曽根首相による外国留学生十万人受け入れ計画など、当時中日友好ムードが最高潮に達し、教育機関はもちろん、ラジオやテレビの日本語講座でも日本語を勉強する人が増えた。また、90年代に入って、「政冷経熱」の時代でも、日本語学習者は増え続け、日本国際交流基金の調査によると、2009年の時点で、日本語を学ぶ者は中国の高等教育機関だけでも55万人で、世界の約6割を占めている。また日本語能力試験の海外受験者数も世界でもっとも多いのが中国であるという。

## 2. 蘇州大学と日本語学科

さて、蘇州大学の所在地江蘇省蘇州市は古く春秋時代に呉の国都として、すでに2500年以上の歴史を有する。揚子江の下流のデルタ地帯と太湖に挟まれ、境内に北京と杭州を結ぶ大運河が流れる。水資源が豊かで、「上には天国あり、下には蘇州、杭州あり」という中国の諺の言うように、古来華東地方における米と水産物の一大豊作産地である。歴史的に優れた文人を輩出し、古典庭園や精巧な工芸品はいまも人々を魅了し続けている。その蘇州に、蘇州大学の前身東呉大学がアメリカメソジスト系の教会大学として創立されたのは1900年のことである。新中国が成立した後の1952年に名称を江蘇師範学院に改め、1982年に中国国務院の認可を得て、蘇州大学と改称された。その後、蘇州にあるいくつかの学院、専科学校を統合し、いまや国家教育部「211プロジェクト」に指定された重点大学の一つ

であり、江蘇省の重点総合大学として生まれ変わったのである。<sup>(1)</sup>

同じ1982年に蘇州大学外国語学院において日本語学科が増設され、いまは在職常勤教員27名の内、教授2名、副教授（准教授）6名、講師19名、博士学位取得者7名、また常に5名の常勤日本人教師と2、3名の非常勤日本人教師が在籍するという人員構成になっている。十数校の日本の大学等の教育、研究機関との交流提携関係を永年にわたって保ち、毎年日本の大学から教員や学生の来訪を受け入れながら、日本語学科からも数名の教員、学生を日本の大学等に派遣している。設立以来の30年間、日本語学科からは2千名に近い卒業生が国内外を問わず各方面で活躍している。また2006年に外国語学院日本語学科言語文学専攻の修士課程の設置認可が得られ、2007年より院生を募集し、いまや24名の修士学位取得者を社会に送り出している。

### 3. 蘇州大学における日本語教育

#### 3.1 基礎段階の日本語教育

中国における日本語教育の指導要領は、1年生、2年生の段階では教育部が2001年に制定し『高等院校日本語専攻基礎段階教学大綱』<sup>(2)</sup>（以下『基礎段階大綱』と称す）に従って、実施されてきた。『基礎段階大綱』は日本語学科1、2年生の学生を対象に教学対象、教学目的、学期及び学習時間、教学内容、教学要求、教学原則、その他の教学問題について、明確な規定と要求が述べられている。また日本語教育基礎段階の発音、語彙、文法、基礎表現等にも具体的に言及している。

この『基礎段階大綱』の原則と基本要請に沿って、蘇州大学外国語学院は独自の教科ごとの教学大綱を定めている。それは科目の担当教員の1学期18週の授業期間中における具体的な授業内容、計画等を示すものである。たとえば、授業対象、教学目的、毎回の授業の内容と要点、それに毎回授業が終わったあとの思考問題、またこの授業に必要な参考書リスト（10～20冊）等という内容である。ネットで公示されるそれは、学生にとっては授業を選択するときの参考となり、一学期の授業の全体像を掴むことができる。新学期の開始前、『基礎段階大綱』の主旨に基づく課程構成やコースデザインなどが学年ごとに編成される。ちなみに、中国の

大学は欧米の大学と同じように始業式は9月で、翌年の1月までが前期、2月上旬頃の春節（日本の旧正月にあたる）を過ぎて、2月下旬から7月上旬までの学期を後期とする。

下に2012年度9月からの日本語専攻1、2年生の授業時間割を掲載する。表の見方だが、蘇州大学では多くの授業を1科目2コマを連続して行う。3コマ連続の授業もある。1コマ40分、コマとコマのあいだ10分の休憩時間がある。午前は8時から12時、午後は14時から17時10分までである。夜はほとんど学生の授業はなく、一部の教室が社会人教育や学術講座に割り当てられている。学生は指定教室で21時まで自習できる。<sup>(3)</sup>ここでは日本語に関連するもののみを掲載しているので、学生は下記の授業のみ受けているのではなく、他にも基礎教養科目や大学が規定するいくつかの科目を受けなければならない。

#### 1年生（2012年9月～）

	月	火	水	木	金
1	基礎	基礎		基礎	基礎
2	日本語（1）	日本語（1）		日本語（1）	日本語（1）
3	日本語による		日本語による		
4	視聴説		視聴説		
5					
午後					
6		日本語			
7		語音			
8					
9					

2年生 (2012年9月～)

	月	火	水	木	金
1	基礎		基礎	基礎	基礎
2	日本語 (3)	泛読	日本語 (3)	日本語 (3)	日本語 (3)
3			日本語による		
4			視聴説		
5					
午後					
6				中日文化	
7				交流史 (選択)	
8					
9					

この時間割表から分かるように、日本語の授業の中で一番多いのは基礎日本語（精読）で、週8コマである。学生もそれを重要視し、教師からの要求もあって、教科書の暗誦に多くの自習時間を費やしている。1年生、2年生の基礎日本語教科書は《新編日語》（第1冊～第4冊）周平、陳小芬著 上海外语教育出版社のものを使っている。この教科書シリーズは『基礎段階大綱』の教学方針にしたがい、語音、文字、語彙、文型、文法それにファンクション用語という内容構成になっている。題材は学校、家庭、社会などの情景設定が多く、それに合わせて日本の文化、風俗、習慣を勉強させる。文の形は会話と短い文章の組み合わせが多いが、手紙や日記等の形式も取り入れている。カリキュラムの構成からも明らかなように、1年生の時は日本語の発音や視聴覚の習得のための授業が組まれている。これは主に日本人教師の担当で、早い段階でネイティブによる発音が習得できる。2年生になってから、<sup>(4)</sup>泛読や日本文化に関する授業を通して、読み書きの能力を徐々に養成するコース編成になっている。

2年間の勉強を経て、どういうレベルに到達できるかはもちろん個人の努力によるが、教育目標として『基礎段階大綱』の読解の項目を例に挙げれば、「辞書などを借りて、『走れメロス』ほどの日本語の文章が読めて、文章の大筋を把握し、理解の正確率が75%以上<sup>(5)</sup>」となっている。『走れメロス』は太宰治の名作で、日本のほとんどの中学校国語教科書（2年次）に載っている。となると、日本語専攻の学生がほとんどゼロからスタートし、大学で2年間勉強して、ほぼ日本の中学2年

生の読解レベルに近づけるようにという目標設定になっているわけである。

### 3. 2 高学年段階の日本語教育

その『基礎段階大綱』に対して、『大学日本語学科高学年段階教学大綱』（以下『高学年段階大綱』と称す）という大学3、4年生を対象とする教学大綱がある。これは1998年の教育部の通達「21世紀に向けての大学外国語専攻教学改革についての若干の意見」にしたがって、教育部大学外国語専攻教学指導委員会日本語組が、まず全国の日本語教育の現状を調査分析し、その結果に基づき、『高学年段階大綱』を制定したものである。この『高学年段階大綱』が2000年3月に大連理工大学出版社から出版された。

この大綱の制定には、当時中国の長年の宿願であったWTOへの加盟がようやく現実味を帯びてきたという背景がある。大学の外国語教育は日本語教育を含め、「WTO加盟後、外国語教育が新しいチャンスと挑戦に直面している。情勢発展の需要に適応するため、外国語教育がどのような対策をとるのか、どのような人材を養成するのか、これは我々が当面する重要課題である。」と、当時の教育部外国語教学指導委員会委員の宿久高教授が指摘している。<sup>(6)</sup>

『高学年段階大綱』は、総綱、課程設置、卒論と実習、試験と評価の四部から成っている。総綱では、『高学年段階大綱』の主旨、適用範囲、指導方針、学期と教育内容を論じている。課程部分では、高学年の必修科目を規定したほか、日本語総合技能科目、日本語学、日本文学、日本社会文化等の科目及び科目ごとの教育目標、教育要求等も説明している。卒論では卒論と卒業実習を説明し、試験と評価では聴解、会話、作文と翻訳科目の試験と評価の方法を規定している。蘇州大学日本語学科のカリキュラムもその目標と要求を具現化しなければならない。次に3、4年生の時間割を掲載し、説明しよう。

### 3年生 (2012年9月～)

	月	火	水	木	金
1	総合		総合	作文	総合
2	日本語 (1)		日本語 (1)		日本語 (1)
3	文法				
4					
5					
午後					
6				外報外刊	日本文化 講座
7					
8					
9					

### 4年生 (2012年9月～)

	月	火	水	木	金
1	総合		総合		日本文学史
2	日本語 (3)		日本語 (3)		
3	日/漢翻訳		ビジネス	文語文	総合
4			日本語	鑑賞 (選択)	日本語 (3)
5					
午後					
6					
7					
8					
9					

ここにも見られるように、基礎段階に比べて精読の授業がやや減っているが、やはり総合日本語（精読）の授業が全体の中心的な位置を占めている。外報外刊、ビジネス日本語、日/漢翻訳等、卒業後に備えての実用的な能力の養成にも目を配っている。総合日本語は『日语 大学日语专业高年级教材第5～8册』（陈生宝 胡国伟 陈华浩著 上海外语教育出版社）という教科書<sup>(7)</sup>を採用している。この教科書は1、2年生の教科書と同じ上海外语教育出版社から出されたもので、全体として統一感があり、基礎段階から高学年段階への移行もスムーズである。また、この教科書は大学院修士課程入試試験の指定参考書にもなっている。

教科書の内容を見ると、1、2年生の時では会話と短文が中心になっているのに対して、かなり高度かつバリエーションに富んだ構成になっている。たとえば、夏目漱石、芥川龍之介等の小説、島崎藤村、中原中也等の詩、東山魁夷等の散文、吉田精一の文学評論、竹内好による魯迅作品の翻訳、司馬遼太郎と桑原武夫の対談、

小田実等の現代作家の作品、また日本古典の『源氏物語』等も取り上げられている。

『高学年段階大綱』には「学生が卒業する時には、しっかりした日本語の基本能力と高い日本語の実践能力を備え、また言語学、日本文学、日本社会文化（地理、歴史、政治、経済、風俗、宗教を含む）等の基本知識をも備えなければならない。<sup>(8)</sup>」と書かれている。上記の時間割課程表が示すように、その要求にしたがって、カリキュラムがデザインされていることが分かる。

### 3. 3 卒論、日本語能力試験、進学

卒論は上記の時間割に反映されていないが、これも大変重要視されている。一人の教師が若干名の4年生を担当し、テーマの選択から資料収集、文章構成、表記注釈の方法、最後の口頭試問（論文答弁）まで、細かく丁寧に卒論の書き方を教える。また、卒論の口頭試問をパスできないと卒業証書は与えられないため、毎年口頭試問時に、学生たちはみな緊張した面持ちでそれに臨み、なかには教師の厳しい質問に泣き出す女子学生もいるほどである。

4年生になると卒論を完成させながら、卒業実習もしなければならない。これは学生から社会人になるための社会勉強の一環として活用されている。日本のインターンシップ制度に相当するもので、多くの学生は自分が内定をもらっている会社で実習し、卒業後、そのまま就職するケースが多いようである。

学生は正規の授業に力を入れなければならないと同時に、日本語能力試験の勉強にも力を注いでいる。中国では1993年より、国内で日本語能力試験が受験できるようになり、日本国際交流基金の統計によると、2010年度中国国内で23.2万人が受験したという。その多くが大学の日本語専攻の学生である。その他、日本語専攻の大学生を対象にした、中国独自の4級試験（大学2年次修了時に受験）と8級試験（大学4年次修了前に受験）があるが、それよりも日本語能力試験1級に合格したほうが日系企業への就職においても、あるいは将来日本の大学への留学においても、一つの考量基準として、かなりのメリットを持っている。現に蘇州大学の日本語学科の学生では2年生の時に日本語能力試験1級に合格する人もおり、多くは3年生の時に合格している。

日本語学科の学生の大部分は4年間の学校生活を終え、就職をしたり、公務員試験を受けたりしているが、二割ほどの学生は中国の大学院に進学したり日本の大学に留学することを希望している。蘇州大学日本語学科は2006年に大学院修士課程の設置が認められ、これにより、母校の日本語専攻の修士課程に進学することが可能となったため、毎年大学院進学希望者の中から2～4名を選抜し、無試験で修士課程に進ませる。中国語では「保研」といい、2012年度では2名である。蘇州大学日本語学科修士課程では日本語言と文化、日本文学、日本社会と文化という三つの専攻コースがある。

#### 4、 ネイティブ教師と国際交流

中国の外国語教育におけるネイティブ教師の果たす役割は非常に大きいものがある。日本語教育においても、中国のほとんどの大学の日本語学科には日本語を母国語とする話者が教師として在籍している。日本国際交流基金の2009年の調査によると、中国における母国語話者教師は2479名おり、日本語教師全体の約16%を占めている。身近な例を言えば、蘇州大学外国語学院はいまや英語学科、ロシア語学科、日本語学科、フランス語学科、朝鮮語学科、ドイツ語学科、スペイン語学科の七つの学科から成っているが（近い将来アラビア語学科の増設も見込まれている）、そのほとんどの学科にネイティブ教師が置かれているのである。蘇州大学日本語学科創立当初、華僑出身の教師が一名、学生も全部で10数名しかいなかったのであるが、それから、規模の拡大につれ、日本の大学あるいは団体との交流も次第に広がり、いまでは常勤の日本人の先生が5名、非常勤の日本人の教師2、3名が授業に当たっている。

担当科目の分配から見ると、中国人教師は主に「基礎日本語」（精読）、「総合日本語」（精読）、「泛読」あるいは「中日文化交流史」を担当し、日本人教師は「語音」、「視聴説」あるいは「日本文学史」を担当することが多い。精読では中国人教師が一、二年生の時に文字、語彙、文法等の基礎知識をしっかりと教え込む。高学年になるといろいろな題材の文章をじっくり解説し、作品の特徴や作者の意図を深く理解させる。それに対し、日本人教師はネイティブの会話を通じて、学生により一

層実践的なコミュニケーション能力を身に付けさせる。ある調査では、学生はこうした中国人教師と日本人教師による異なる日本語教授法を肯定的に捉えていることが判明している<sup>(9)</sup>。このように母国語の話者と中国人教師双方のレパトリーの融合が図られることが重要である。

また、カリキュラムに反映されていない課外活動のところで、日本人教師の果たす役割も大きい。たとえば、課外活動の日本語スピーチコンテストや日本語演劇、それに週末の日本語サークルの多くは、日本人教員と学生が自主的に行っている。交流協定のある日本の大学教員による短期講座や来訪日本人大学生との交流会も盛んである。このような実践的な活動が日本語専攻の在校生にとって、普段少ない日本語を話す機会を補っているし、また教科書以外のことを学ぶ機会ともなっており、異文化理解及びコミュニケーション能力の増進に寄与することにもなっている。

多くのさまざまな専攻、経歴を持つ日本人教師が蘇州大学日本語学科で活躍できたのは、蘇州大学、外国語学院、日本語学科各レベルでの積極的な対外交流がもたらした結果でもある。その中でも、花園大学との交流は特筆すべきものである。いまから遡ること25年前の1987年10月12日に花園大学と蘇州大学の間に交流協定が結ばれて以来、花園大学から蘇州大学に派遣した教員はいままで12名を数え、教員の専門分野は国文学、日本史学、教育学、社会福祉学等各領域に及ぶ。一方、蘇州大学からも2年ごとに花園大学に交換教員を送り出している。主に中国語の他、中国文化論や中国における日本語教育等の科目を担当している。学生の長期（1年間）交換留学も毎年行われている。また、花園大学から蘇州大学への夏期語学研修は1988年の夏を皮切りに、以降隔年ごと実施され、今日に至っている。毎回の夏期語学研修の終了後、学生たちの綴った感想文が一冊の記念文集にまとめられている。

また、その正式の交流の前史として、花園大学の学生が自主的に「花園大学中国を旅する会」を組織し、すでに1980年に中国への旅行を実現させ、その時の様子が『初逐鹿<sup>(10)</sup>』という文集に記録されている。また、いまは花園大学名誉教授となられた桐田清秀先生が1995年9月、10月の二ヶ月間蘇州大学に滞在し、日本語

学科学生のために「作文」、「ビジネス日本語」、「外報外刊」、「日本概況」を担当された。その時の蘇州の様子、大学の状況、授業の様様、学生との交流などを詳しく綴った報告書があるが、その最後に、「日語系 93 級生（三回生）20 名を、わたしは生涯忘れることはなかろう。授業での彼らのキラキラ光る眼は、教育実習生のレポートを想起させた。この歳になって、教育の原点を体験させてくれた彼らに感謝する。」と感動的に書き残されている<sup>(11)</sup>。

このような交流の歴史がまさに中国の改革開放の歴史と重なるものであり、これこそが真の人間同士の交流でもある。

## 終わりに

改革開放以来、中国における日本語教育は大きな成果を上げながらも、まだいくつかの課題が残されている。その一つが学生のコミュニケーション能力の養成問題である。1999 年 7 月に発行された中国日本語教学研究会編の『中国日本語教学研究文集』第 8 号は「21 世紀の日本語教育」を中心に議論を展開している。そこで強調されているのは、学習者主導型授業への転換とコミュニケーション能力の養成である。その背景には、学生の暗誦能力と記憶力が優れていても、言葉以外の文化的理解力や実際のコミュニケーション能力が不十分であるという、多くの日本語教師の共通認識がある。言葉は人々の行動様式、美的感覚、価値観等の文化的要素の上に成り立っているので、文化と切っても切れない関係にある。「日本語を教える場合、その支えとなる文化的背景などを総合的に分析し、言葉を教えると同時に、学生にもものを見、ものを考えるための方法を与えなければならない。」<sup>(12)</sup>と中国日本語教学研究会会長、吉林大学教授の宿久高氏も呼びかけている。

また、コミュニケーションというものは社会生活を営む人間の間に行われる言語や文字等の媒介による感情や思考の伝達であり、双方面あるいは多方面の同時通交という特質を持つため、自分の考えを発信しなければ、コミュニケーション自体が成立しない。したがって、日本語学習者にとっては日本語で発信できる能力が不可欠であることをここで強調したい。ひと、もの、かね、情報が国境を越えて行き交うグローバル化の今日では、相手の文化を尊重すると同時に、如何に

自分の考えを相手に伝え、かつ相手に考えるヒントを与えるかが自ずと重要になってくる。そういう意味で、日本語学習者は単に情報を得るための日本語学習から、自国の文化や考え方も発信できる日本語学習へと意識を変えなければ、本当のコミュニケーション能力も身につけてこないであろうし、また教師自身も日本語の研究をするだけでなく、日本研究にも力を入れなければならないであろう。

蘇州大学における日本語教育もすでに30年の歴史を超えている。いまの学生は1990年代以降に生まれた世代である（中国でいう「90后」）。考え方、目的意識、価値観も時代とともに多様化している。昔のように日本の経済優位性への、あるいは将来の就職への関心から、しだいに日本のアニメ、マンガ、ゲームなどのポップカルチャーにシフトしていることも事実である。そういう変化をどう教育の現場に取り込んで行くかという課題もあるが、人文精神豊かで時代に適応でき、将来を担うことのできる人材の養成が強く求められているのである。

注：

- (1) 王卓君、朱秀林著《苏州大学校史丛书 世纪鸿影——苏州大学校史图集》、苏州大学出版社、2007年12月、P3～10を参照されたい
- (2) 最初は1990年に制定された《大学日本語専攻基礎段階教育大綱》を指導方針とし、その後、新しい日本語教育の発展に適応するために、その《大学日本語専攻基礎段階教育大綱》を全面的に改訂し、2001年6月に新しい『大学日本語専攻基礎段階教育大綱』が大連理工大学出版社から出版された。その経緯は宿久高「中国日语教育的現状与未来—兼谈《专业日语教学大纲》的制定与实施」、《日语学习与研究》、2003年第2期、P51～52を参照されたい
- (3) 中国の大学は日本の大学と違って、ほとんどの大学が全寮制で、学生たちがキャンパスの中で共同生活をしている。学内ではすべての生活施設があり、一つの町と同じような感じである。そのため、朝は正式の授業が始まる前に教室で早朝自習ができ、夜には9時まで自習することができる。
- (4) これは精読に相応する授業で、日本語各ジャンルの文章をざっと目を通す、購読するという意味でつかわれる。
- (5) 教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组《高等院校日语专业基础阶段教学大纲》、大連理工大学出版社、2001年11月、P89

- (6) 宿久高「中国日本語教育の現状と未来—兼談《专业日语教学大纲》的制定与实施」、《日語学習と研究》2003年 第2期、对外经济贸易大学出版社、P52（原文は中国語、上記引用部分は筆者訳）
- (7) この教科書が20年前に出版されたもので、ほとんど改訂なく、今日に至ったわけで、少し時代に合わないところも出てきているので、別の教科書を変えようという動きも出ている。
- (8) 教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组編《大学日本語学科高学年段階教学大綱》大連理工大学、2000年3月、P5
- (9) 山田陽子「中国の高等教育機関における日本語教育と学習者の一側面——遼寧省の大学を事例に」、『人間文化研究』名古屋市立大学大学院人間文化研究科、第15号、2011年6月、P76～77を参照
- (10) これは唐太宗李世民的時の宰相魏徴の「述懐」詩にある「中原初逐鹿」より付けられたもので、ここでは初めて中国に行つて、何かの収穫を得ようという意気込みが感じられる。
- (11) 桐田清秀「1995年度、蘇州大学交換教員報告」、『花園大学文学部研究紀要』第29号、1997年3月、P274
- (12) 宿久高「中国における日本語教育と課題 2006年清華大学日本語文化国際フォーラム基調報告」、張威主編《日本語文化研究—日本語学框架与国际化视角 2006年 清華大学首届日本語文化研究国际论坛论文集》、清華大学出版社、2008年9月、P5

#### 参考文献：

- 国際交流基金編集出版、『海外の日本語教育の現状 日本語教育機関調査・2009年』、2011年3月
- 王卓君、朱秀林著、『苏州大学校史丛书 世紀鴻影——苏州大学校史图集』、苏州大学出版社、2007年12月
- 教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组編、『高等院校日语专业基础阶段教学大纲』、大連理工大学出版社、2001年11月
- 教育部高等学校外语专业教学指导委员会日语组編、『高等院校日语专业高年级阶段教学大纲』、大連理工大学出版社、2000年3月
- 林大 編集代表、日本語教育学会編、『日本語教育ハンドブック』、大修館書店、2004年9月

中国日语教学研究会编、《21 世纪的日语教育——中国日语教学研究文集 8》、大连理工大学出版社、1999 年 7 月

张威主编、《日本语言文化研究—日本学框架与国际化视角 2006 年清华大学首届日本语言文化研究国际论坛论文集》、清华大学出版社、2008 年 9 月